

■ アルブレヒツベルガー

「……して、卿の結論を一言で言えばどうなるのだ？」

尊大であると同時に、人にものを命じるに慣れた重みと鞫さを孕んだ男の口調は、この国に住まうほとんどの人間にとつて、頭上を圧する威を感じさせずにはいられなかった。

机の前に佇立していた男は、跪礼の姿勢を取つて深々と頭を垂れた。

「報告に關しましては、提出した……」

「分かつている。卿は私にこれを全部読めと命じるのか？」

巨大な机の上には、厚さにして数センチにも及ばうかという書類が積まれている。

「卿は科学者だ。可能な限りことを正確に伝えようとするのは良い。それが卿の義務だからな、アルブレヒツベルガー……」

「恐れ入ります、公爵閣下」

跪礼の姿勢のまま、アルブレヒツベルガーと呼ばれた男はさらに頭を下げた。

「一言で申し上げれば、ジギスムント陛下におかせられては、大帝陛下のすべての遺伝形質を継承されており、まさに大帝陛下の完璧なる後継者であらせられる。それに尽きるというのが、今回の報告の要旨であります」

「私に忬度して、ありもしない作り事を申しておるのではあるまいな」

「とんでもないことでございます」

アルブレヒツベルガーは視線を上げる。顔色は青白いと言うよりも土気色を帯びて黒ずんでおり、見る者をして、なんらかの病を身のうちに孕んでいるのではないかと疑問を持たせるほどだ。しかし、眼鏡の奥の双眸は細く、研ぎ上げられた刃に似た鋭さと強さを失っていないかった。

「他のことならばともかく、大帝陛下と今上陛下の御身にかかわる事実であります。忠良なる臣民たる、このアルブレヒツベルガーが、何条をもちまして、今上陛下の御後見たる……」

「もう良い、分かった」

公爵と呼ばれた男……ゴールデンバウム王朝の

開祖にして大帝ルドルフの女婿であり、第二代皇帝ジギスムント（二世）の父にして摂政大公たるノイエシュタウフェン公ヨアヒムはひどく五月蠅そうに、アルブレヒツベルガーの長広舌を遮った。

「卿の研究を疑うわけではない。しかし……これは、ここだけの話だぞ。万一にも私がこのようなことを口にしたと他言すれば、卿はもとより卿の家族、下僚に至るまでその生命は保証しかねることになるが、よいな？」

「無論のことです、閣下」

アルブレヒツベルガーが、右拳を胸に当てる忠誠の誓いで応じるのに、ノイエシュタウフェン公はなおも疑わしげな表情を崩さなかった。

「卿の忠誠は分かった。私の言いたいのは、ジギスムント……いや、今上陛下は大帝陛下の男子直系の孫であらせられない……ということだ。それでも、大帝陛下の資質を十全に引き継ぐ、などということが本当にあり得るのか？」

「ございます」

アルブレヒツベルガーが再び深々と頭を沈み込ませたため、その表情は完全にノイエシュタウ

フェン公の視界の外になった。とは言え、頬が瘦け、ひどく血色の悪いその顔は空白であり、よほどに注意深い観察者でもその内心を見て取ることは不可能だった。

「遺伝は祖先からの継承によつてのみ伝えられるものではありません。環境要因によつて形質変化が引き起こされ、そうした獲得形質が新たな遺伝に追加され、継承されていく、そうした性質をも併せ持つのです」

「……アルブレヒツベルガー、それでは……」

「いえ、今上陛下の場合、大帝陛下の御高孫としてその聲咳に長く接せられ、また大帝陛下と公爵閣下による、これ以上を考え得ぬほどの帝王教育のもとで成長あらせられたわけであります。このような環境が、今上陛下の遺伝に影響を与えぬはずはなく、結果として大帝陛下の遺伝上の御資質のすべてを余すことなく継承されているとの結果も、当然のことと臣は愚考する次第でございます」

「しかと誤りはないか？」

「お疑いあらば、我が報告書をしかるべき研究者をしてご検討せしめられたく。ただいま申し上げた学

説は、何も臣の独創ではございません。かの地球時代、遺伝に関する研究がその萌芽を見、後の隆盛に至る礎石が築かれた時期、当時の地球のほぼ半ばを支配した国家にて、確立され、長く研究・発展せしめられた学説であり、臣はその系譜の末席を僅かに汚す存在でしかございません」

「分かった。もう、よい。卿は優れた学者かも知れぬが、どうにも話が長い」

「恐れ入りまして、ございます」

「卿の言う通り、卿の報告書はしかるべく検討させる。その上で、卿の報告に誤謬なしと判断された場合、卿の上申は認めよう」

「ありがたきお言葉。感謝の言葉も……」

「まだ感謝には早すぎる。卿の報告が真実だと確認できたなら、だ。もし、嘘偽りありと判断された時のことは、覚悟しておるな？」

「無論のことでございます」

依然、アルブレヒツベルガーの顔は完全な空白のままだったが、その胸の内の弦きを耳にしていれば、ノイエシユタウフェン公はこの科学者への信頼を驚愕と憎悪に置き換えたことは間違いないかった。

「馬鹿め……」

アルブレヒツベルガーの内心の弦きがそれだった……なにがしかるべく検討させる、だ。劣悪遺伝子排除法……あの愚法に反対し、成立を食い止めようとした多くの研究者たちが生きていけば、今、ノイエシユタウフェン公の執務机の一面を占有している彼の報告書が、まったくの『似非科学』による欺瞞の塊でしかないことは、ただの一読で見抜かれただろう。だが、彼らはもうこの世の人たちではない。

現時点でこの報告を読解し、理解し、正否を判断できるとすれば、それは、彼アルブレヒツベルガーとその同僚・下僚しかない。そして、彼らが報告の虚偽性を報告するはずはないのだ。しかも、ノイエシユタウフェン公は、彼の息子たる現皇帝の権威と自らの権勢の維持のため、この報告書を受け入れたがつている。そう、彼アルブレヒツベルガーがそうし向けたのだ。

「畜生め……」

アルブレヒツベルガーは胸の裡で地団駄を踏む。『自浄能力を失い、利権や政争にのみ食指を動かす衆愚政治と堕した』と批難された銀河連邦末期の人類社会。その弊風を吹き払ったルドルフ大帝によ

る、人類社会の刷新と再建は、人類にとって、科学技術にとつての福音になるはずではなかったのか。それが何だ、旧銀河連邦時代に人類の達した叡智の最高峰たる知識と技術を、細々とも後世に遺し、伝えていく。こんな詐略を使ってまで、そのための努力に生命を懸けねばならないのも、すべてルドルフとその後継者の愚劣さのしからしむるところではないか。

「よろしい、下がりましたえ」

「貴重なお時間を頂きましたこと、感謝に堪えませぬ。何とぞ、よろしくお取りはからい……」

「わかった。無用の挨拶は止めるが良い」

アルブレヒツベルガーは跪礼を解き、貴人に対して背を向ける非礼を避けるため、摂政執務室のドアまで後じさる。全身が廊下に出た時、過剰なまでの……そしてゴールデンバウム王朝特有の……装飾を施した分厚いドアが閉じ、彼の視界からノイエシユタウフェン公と彼の報告書を閉め出した。

衛兵に背を見送られながら、アルブレヒツベルガーは胸の裡に新たな眩きを漏らしていた……ルドルフとジギスムント現皇帝、それに、ルドルフが晩年にもうけた、寵姫マグダレーナとの間の一子の遺

伝情報。それらを時限爆弾として研究所のデータベースに封印しておくでしょう。

「何が完璧な遺伝子だ……」

無論、それも言葉どころか、咽喉の奥の僅かな震えとしてでさえ音声に変えることはしない。ノイエシユタウフェン公は無能ではないし、恐るべき細心さと猜疑心の所有者でもある。叛逆の意を込めた囁き声は、どのように細やかであっても、彼の耳から逃れることはできない。公爵執務室につながる通路は、そのまま恐るべき盗聴装置であり、監視装置であるのだ。

だが、そのノイエシユタウフェン公の監視網も、人の内心までを読み取ることはできない。

ルドルフは遺伝子を盲信した。彼は自らの遺伝子を完璧なもの、全人類に対する『完全さ』の指標となるべきものと信じて疑わなかった。実際にアルブレヒツベルガーが分析した結果では、ただの強壮にして壮健な男性のそれと何も変わるところはない。所詮、『完璧な』人間など存在しないのだ。

ジギスムント皇帝がルドルフの完璧な遺伝的後継者というのも虚言でしかない。皇帝ジギスムントは、遺伝的にはルドルフの孫であり、ノイエシユタ

ウフエン公の息子の一人でしかない。ジギスムントの遺伝情報がはつきりと、その事実を示していたのだ。

ルドルフに養育された環境がジギスムントの遺伝的形質に影響を与え、変化させ、ルドルフと同じ形質を獲得する。そんなものは、数千年も前に廃れた似非科学の戯言でしかない。だが、その事実もまた、シリウス戦役を初めとする動乱の中で散逸し、僅かにアルブレヒツベルガーらの資料の中に余喘を保つのみである。

だが、ノイエシユタウフエン公は学者ではなく、政治家である。彼らは事実を信じない。彼ら好みの真実を信じようとする。ノイエシユタウフエン公は信じるだろう。現皇帝を大帝の完璧な継承者として内外に喧伝するはずだ。ゴールデンバウム王朝の後継者達も、その輦みに倣うに違いない。

遺伝的にルドルフにより近いのはジギスムントではなく、むしろ寵姫マグダレーナがなし、その先天性疾患のゆえをもつて闇に葬られた嬰兒なのだと知れば、ノイエシユタウフエン公を初めとするゴールデンバウム王朝の支持者たちはどのような表情で事実を受け入れることになるのだろうか。

アルブレヒツベルガーの研究所、詐略と欺瞞と謀略によつて設立されるはずの、科学の細やかな待避所の奥深くに秘匿されることになる、ルドルフとジギスムント、そして名も無き嬰兒の遺伝情報。生命の神秘の秘奥……不老不死、あるいはそれに近い、たとえば難老難死に関する知識……に達した研究者が現れた時、この情報の封印は解けることになる。そのとき、ノイエシユタウフエン公の神話は、ゴールデンバウム王朝の権威と共に砕け散り、地に墜ちる。

それがいつのことになるのか、遂には封じられたまま忘れ去られることになるのか、あるいは砕かれるべき王朝の権威そのものが既に消滅しているのか。もはやアルブレヒツベルガーの視野の地平を遙かに離れた未来のことに過ぎなかった。

アルブレヒツベルガーを代表者とする
ヒオロギーシエ・フォルシユングスゲマインシヤフト
生 物 学 研 究 共 同 体 が設立され、

その研究所が帝都郊外ホーエンフュッセンに完成するのは、この二年後のことである。

研究所が設立されて五年、既に研究所長を辞していたアルブレヒツベルガーは人知れず世を去った。彼が残した遺産は、その後四世紀余りにわたって研究所の奥深くに秘められ、他者の目に触れることはなかった。

☆★☆

決して大量のデータではなかった。熟練した研究者である彼女の目から見れば、それは三人の男性と一人の女性の遺伝解析情報であることは一目で見えて取れた。

「これは一体……」

それまで決してアクセスを許されなかった、過去の研究アーカイブの一部。突然のアクセス許可通知は、恐ろしく古い書式で記され、最初の内、彼女は何かの悪戯、あるいは悪意を持ったメッセージではないかと疑ったほどだ。

だが、メッセージが登録された日時が彼女を驚かせた。約四〇〇年余り前、かつ、メッセージに認証を施している人物の名前は……

「……アルブレヒツベルガー……嘘でしょ、そんなまさか、そんな……」

好奇心、というよりも研究者としての探究心に導かれるままに、彼女はそのアーカイブを開く。保存されていたのは前述したとおり、四人の、おそらくは四〇〇年余り前を生きた帝国人の遺伝解析情報だった。

情報を、専用のシステムにかけ、解読を進めていた彼女の手が不意に止まった。

信じられぬものを目の当たりにした、あるいは目前に突然、底なしの暗渠が口を開いて彼女を引きずり込もうとしているのに気づいたような、恐怖と混乱がその表情を覆い尽くすまでに数瞬を要さなかった。

「そ……そんな、こ、これって……」

ヴァイフォーン

映 話 の着信を告げる電子音が、室内の静まり返った空気の中に響いた。

「だ、だれ!？」

聞き慣れた、しかし、決して彼女が好意を持つ謂われのない、耳障りにざらついた声が彼女の名を呼んだ。

『私だ。話がある。ちょっと時間を作ってくれないか』

■ 休暇

帝国暦四八四年二月、ラインハルト・フォン・ミューゼルとジークフリード・キルヒアイスは、約半年余りにわたった長期任務を終え、オーデイン帝都へ帰還した。任務達成の結果、中佐だったラインハルトは大佐の位階を約され、キルヒアイスはまた大尉の肩章を帯びる身となることが決まっている。

ラインハルトは一七歳までにまだ一ヶ月余り、キルヒアイスはまた一七歳となつて一ヶ月足らずでしかない。約一年半前に幼年学校を卒業してわずかに一年半。ラインハルトは六つの階級を、そしてキルヒアイスはさえ四つの階級を駆け上がるという、恐るべき昇進のスピードだった。

他の多くの帝国軍人にとつて経歴の終点である大佐ですら、ラインハルトにしてみれば、単なる通過点でしかない。いや、帝国軍人として究極ともいふべき元帥位ですら、豪奢な黄金の髪ヘアの少年にとつては目的を達するための一手段と言うにすぎなかった。

「そう言えば、ご存じですか、ラインハルトさま。士官学校の戦術教官の……」

キルヒアイスが上げたのは、彼らが幼年学校時代に受講した、士官学校の戦術教官の名だった。

「ああ、あの講座は面白かった」

軍人らしからぬ長髪と、綺麗に整えた口髭が印象的な、端正な紳士だった。まだ大尉か少佐くらいだったはずで、年齢も三〇前に見えた。

この教官がラインハルトの記憶に強い印象を与えたのは、彼がどのような教科書も使わなかったことだった。代わりに膨大な過去の戦史や歴史の文献から抽出した戦訓や事例を中心としたケース・スタディを行い、時には数日ばかりでのシミュレーションを生徒たちに課したのである。

☆☆☆

ラインハルトの興味をさらに惹いたのは、このシミュレーションだった。

「全般状況はこうだ。貴官らの部隊の任務は拠点Aに立てこもった敵軍を撃退し、当該の拠点を奪取するにある」